

議事録(議事要旨)[第3回会議]

1. 日 時 令和7年1月20日(月)16:00~18:00
2. 場 所 福井県庁地下1階 正庁
3. 議 題 (1)「第4期福井県教育振興基本計画」の案について
4. 出席者 岩崎行玄座長、秋田喜代美委員、五十川早苗委員、荻原昭人委員、菊野昭彦委員、後藤ひろみ委員、澤田真由美委員、澁谷政子委員、高田五月委員、田中謙次委員、八田幸恵委員、平井聡一郎委員、前田鎌利委員、吉川雄二委員

5. 議事要旨

【議題】

- 事務局から、第4期福井県教育振興基本計画の案について説明を行った。
- 委員から、乳幼児期の保育教育から高校大学までのつながりが重要であると考えており、幼小中高のトータル教育の推進について書かれ、特別支援においても、就学前教育からのつながりを書いていることがとても大事な内容であるとの意見があった。
- 委員から、「誰一人取り残さず、個性が尊重される学びの推進」について、より一層、子ども・若者が主体となって、子ども自身も教育をつくる一人であるという参画が重要である。子どもの学校の「居場所感」が高まっていく居心地の良い学校づくりには、子ども自身が学校の運営に関わっているという感覚こそが重要であり、子どものメンタルヘルスのウェルビーイングを促すと言われているとの意見があった。
- 委員から、チーム学校の思想で、教職員一人ひとりを大切にする働き方に取り組んでいくことが重要。教職員だけではなく、学校に関わる様々な方たちがチームになって輝いていく。子どもとともに、子どもを支える教職員も学校も輝いていくような福井の教育というものが、これから求められるとの意見があった。

- 委員から、福井が先進的なこととして、授業研究等でも子どもの声を交え、子ども参画で行っているところが教師の学びの大きな力となっている。こうした福井の教育の魅力を周知していくところも子どもの声を届けていきながら本計画を普及啓発できると良いとの意見があった。
- 委員から、SCからは校内サポートルームができたことはとてもありがたいとの声を聞く。全校配置は中々難しいことかもしれないが、設置の拡充をお願いしたい。また、直接子どもたちに関わる支援員に対する教育も必要との意見があった。
- 委員から、定時制・通信制高校について、福井県では公立の通信制高校の選択肢が一つしかない。難しいかもしれないが、今後もう少し選択肢が増えるとうよいとの意見があった。
- 委員から、生徒や保護者への対応は、それ自体を減らすとか外注するなどの代替手段を見つけることが難しい。チームで対応するということが解決策だと思うが、今回の施策に挙げられている「学校業務改善アドバイザー」がそうした場面でどんな役割を果たすのかが具体的に見えなかったので内容を聞けるとよいとの意見があった。
- 委員から、アウトプットの仕方を工夫し、これをやると素晴らしい未来が待っている、という形の発信が大事。やめるものは何かを明確にして新しいものに取り組み、先生方のやる気を高めてほしいとの意見があった。
- 委員から、後方支援がしっかりできるかが大きな成果を出せるかの肝になる。現場は人手不足とよく聞く。人の支援やその他の支援も含めて新しい計画の実行のためには、現場へのバックアップ体制が必要との意見があった。
- 委員から、先生が生徒に向き合う時間を確保する環境職場が大事になってくる個人的には先生方がやるべきことは教科書を丁寧に理解させることに尽きる。ここに全てを集中させれば全て上手くいくとも考えているとの意見があった。
- 委員から、令和8年度からは部活動が土日でなくなる。その数年先には平日も部活動地域移行となる。子どもの生活リズムが崩れ、勉強する時間がスマホにとられていく。そういう生活の崩れ、そして勉強に向かわないことが想定される中、先生にどういうバックアップ体制をつくり生徒に向き合う時間をしっかり

つくってあげられるかが計画を成功させる肝であるとの意見があった。

- 委員から、計画の中身は固まってきているが、計画を実施する人をどう育てていくかは重要。学校の外との交わりという点で先生の負担にならないよう、教育に関わる様々な人たちが上手く流れていくようなチーム学校としての活動、学校業務改善アドバイザーとの連携などが生きてくると、現在は手が届かないところも補えるのでは。次の世代の主役を担う人材を育成していく形が見えてきて、県民の期待に応えられるようになるとういとの意見があった。
- 委員から、子どものためにというところが前面に出ていて、一人の地域に住んでいる大人として嬉しくなった。地域の未来や将来を考えることは、子どもでもあり、一人の県民として尊重しながら、一緒に考える仲間であることを伝えられると、心まで響いて何かを考え、福井という選択肢があるなど考えてもらえるのではないかとの意見があった。
- 委員から、全体を見て、自分の感情を表現したり行動したりする自己表現の部分を謳っていない。それぞれの施策を実行する中で折り込んでもらえるとういとの意見があった。
- 委員から、部活動の地域移行について、受け皿が体育会系は多いが、文科系は少ないと感じている。アートで表現するとか、音楽で表現するとか何かを表現するというを学ぶ場所がどれくらい受け皿としてあるのか。部活により教育ではない部分で学校が補ってきた大切なところはとうなるのかとの意見があった。
- 委員から、地域に一つ学校を存続ということにこだわってしまうと、本当はクラスが沢山あって人と接することが大切なのにできなくなる。今の大きな転換期において、方針4で学校の在り方も少し考えましようとう盛り込まれており、少子化に向けて、人が沢山必要になる中で、福井県全体の教育のデザインを見直す期間になってくるのではないかとの意見があった。
- 委員から、業務削減とか負担軽減と記載があるが、その主語・主体が誰なのかが重要。やるべきだと皆分かっているが、誰もボールを持たないということが陥りがち。学校が主体ならばそのようにしっかりと伝えるなり記載していくべきとういとの意見があった。

- 委員から、学校で業務を削減することに、まだまだ抵抗感がある学校や先生、管理職の先生も多い。今回の基本計画の中で働き方改革と明確に書いてはいるが、それが何のためかをもう少し具体的に書いても良いのではないか。現場が迷わず、罪悪感を持たずに業務を削減していけるように力強く一押ししてほしいとの意見があった。
- 委員から、全体に明るい次世代をつくっていこうという力強いメッセージが随所に現れており、バランスの取れた計画になっているとの意見があった。
- 委員から、一番メインに記載がある、子どもたちの夢・希望や主体性を伸ばしていく中で、福井の良さ・ふくい愛等を伸ばしていこうという施策があるが、福井のことを知るということだけでなく、自分たちが小中高でやっている学習そのものが日本の中でもすごく注目され、先進的なことだということ、子どもたち自身も分かる、意識することで自分たちの活動に自信を持つことができ、福井で学んだことが自分の成長になっているという考えにつながると良いとの意見があった。
- 委員から、チーム制は本当に大事だが、今いる人員でチームを組んでも、場合によっては仕事が増えるだけかもしれない。補助する者や教員以外の様々な立場の人とのチームが大事との意見があった。
- 委員から、校内サポートルームがあることで学校のつながりを持てることは子どもたちにとっても不登校になってしまわない一つの大きなつながりだと思う。設置拡充をお願いしたいとの意見があった。
- 委員から、今回会議に入るまで、私はこういう計画があったことを知らなかった。たぶん計画について知らない保護者もとても多いと思う。こういう計画があることを、学校だけではなく子どもたちや保護者に向けて様々な形で発信してほしい。県としてこういうふうを考えているということを知ることができるというのは子どもたちの将来の選択肢にもつながっていくとの意見があった。
- 委員から、地域デザイン講座のところに「地域OB」というキーワードがあるが、もっと広く、協力できる企業も沢山いるため、「地域企業」という言葉も一緒に入れてもらえると、その後の「地元就職・地元進学」にもつながるとの意見があった。

- 委員から、学校教育での支援は個人的にもどんどんしていきたいが、やはり企業として社員の増強、有効求人率の問題がある。地元に関わる人たちに就職や起業、アントレプレナーシップ、そういったことを目指してもらえると我々がやった甲斐があった、となる。そうした目線からも「地域企業」という言葉を重要なところにも入れてもらえると良いとの意見があった。
- 委員から、生涯学習について、「ふるさと未来講座」等を実践しているが、県民が様々な生涯教育に関わる取組みをしているため、そういったところとつながりながらやっていくことで、生涯学習の振れ幅がもっともっと大きくなる。「学習」と付いているから学校に関係する人がやらないといけないと考えず、積極的にやっている市民グループ等も巻き込んでいけると幅の広い生涯学習になるとの意見があった。
- 委員から、SDGs教育について、もっと能動的にもっと主体的にやる、SDGsを学ぶのではなく、実践している学校であり子どもたちであるというくらい、私たち大人をびっくりさせてほしい。計画では「参加促進」という言葉で記載があるが、もっと能動的・主体的な言葉で表現してほしいとの意見があった。
- 委員から、部活動地域移行について、今まで部活としては大学の同好会のようなことができなかったが、そういうものが生まれる機会にはなると思うとの意見があった。
- 委員から、家庭教育について、提案だが、「家庭教育」という言葉を「家庭での体験や経験」とどこかで置き換えると、保護者や学校の先生にその言葉の意味や家庭に求めるものがもう少し見えてくるのではないか。学校でも教育受けて家庭でも教育を受けて、というイメージに捉えられてしまう。子どもたちと一緒に遊んでいることも体験・経験につながる。もう少しリラックスした柔らかいものになると良いとの意見があった。
- 委員から、ウェルビーイングの言葉が入っているのが良かった。この先生たちと一緒に学校教育ができて良かった、と思える先生を是非増やしてもらいたいとの意見があった。
- 委員から、教科学習と総合的な探究の時間を利用した二分化という発想が強く出ていてと感じた。福井の学校教育は元々すごく先進的で探究的な学びを進

めていた。それは総合的な探究の時間だけではなく教科の時間でも探究的に学ぶことをものすごく力を入れて取り組んできたため、教科学習をDX化していく、探究と教科を切り離していくというふうに見えるまとめ方に関しては少々違和感を抱いた。やはり教科においても探究的に学ぶ、深く学ぶ、ということをもっと前面に出した方が良い。DX化も重要だが、概念の深い理解、概念を使った探究というものを教科学習においても充実させることを文言として出してほしいとの意見があった。

- 委員から、県立高校の教員配置の充実についても是非一言記載がほしい。県立高校を維持していくことが難しい状況にある中、それでも維持するという方向で行くと思う。そうなった時に高校は教科数が多いため、全教科の教員を各学校に配置することが難しくなってくる。教科学習においても深い理解を追求していくと、対面で丁寧に教科書を指導することが重要となってくる。県立高校の教員をいかに配置していくかについても記載があると良いとの意見があった。
- 委員から、全体構成として、方針1に学びに目線を向けているのは良い。教育DXは単なるデジタル化ではなく、学校そのものの改革。その一番の柱は授業である。教科を活かして探究の時間にさらに社会に結びつけていく。そもそもの教科の学習における探究はとても大事。問題解決型の学習になってくる。それをベースに総合的な学習の時間の中でのPBLに変わっていくという流れはある。授業を学習者主体にする。そもそも主役とも言っているのだから、学習者主体の授業の確立というものが一番のメインとなる。そこを進めていくSSH、DXハイスクール、小中学校のリーディングDX等の改革にどんどん取り組むところをモデルにやっていく。リーディングDXは抜けていたと思う。モデル校を核に広げていくことが必要との意見があった。
- 委員から、全体的に「〇〇教育」が非常に多い。一つ一つに理解が得られるのか。受けとめる側は、これもあれもやらないといけないとなる。プラスの部分とカットする部分のバランスを取っていくことを明確にしていくことが重要との意見があった。
- 委員から、小中高大の連携の中で特に大事なこととして、小中の段階でのキャリア教育をもう少し前面に出して良いのではないか。高校を選択する段階で、普通科高校と実業高校に分かれる。その選択の段階で、自分の職業意識、将来の職業や仕事というものを意識してくることが大事であり高校に入ってから

では遅いかもしれない。小中からのキャリア教育、アントレプレナーが大事との意見があった。

- 委員から、管理職の学校改革研修が取り上げられていて良い。文部科学省も今回、来年の事業の中で高校のマネジメント研修を行う。校長先生は経営者であり、研修は良い。次の管理職を育てる研修やっていくことも大事との意見があった。
- 委員から文科省の概算要求に学校管理職のマネジメント研修の充実があり、しっかりやっていくことが大切。学校教育法上、校長先生は教員ではなく経営者だが、そのためのトレーニングを受けてきていないため同時進行でやらなければならないとの意見があった。
- 委員から、全体は本当によくまとめられている。私がかたくできたのは、5年後の2029年に育っている子どもたちはとても力強い子ができそうだ、ということ。個性も発揮でき自分で人生を切り開いて挑戦し続けるような大人で、かつ多様な存在を認められる人。様々な教育ややりたいことが記載されているのは、まさに多様な人が沢山いるからであり、様々な選択ができる選択肢を提示されている、と私はポジティブに捉えている。逆に何かを絞るより、全部やるわけではなく、この中から選べるというのがすごく大事なポイントになってくると思う。多様性を認めていくのは社会において大事なこととの意見があった。
- 委員から、こうしたビジョンを掲げ、落とし込んでいく中で、今度ここから先生に、先生から子どもたちにこのビジョンや中身を上手く伝わっていく仕掛けが必要。どうやって自分の言葉で子どもたちに分かるように、そういった大人になっていけるような伝え方ができるのか、ということがミソになると思うとの意見があった。
- 委員から、KPIを見たが、今後想定される未来がこの5年の中でも変わってくる。今はこのKPIで設定されているのは素晴らしいと思うが、逆に世の中変わったから、もう少しアレンジしてあと二年間走った方がいいよね、というフレキシブルさがあっても良いとの意見があった。
- 委員から、全てをやれというのはまず無理なので、レストランのメニューのように、うちの学校はこれを重点的に取り組む、という選択できるような形で、市町の教育振興基本計画も同様に、全ての学校にやってほしい部分と選択できる

部分がある程度明確になると良いとの意見があった。

- 委員から、一貫して言ってきたが、良い計画を立てても先生が元気でないと進められない。施策の方針はこれでいいと思うが、具体的にどうしていくのか示してもらえると現場は安心するとの意見があった。
- 委員から、定年延長の中で、役職定年した人のモチベーションをいかに5年間保つのは非常に困難。60歳以上の先生のウェルビーイングをどうしていくのかは今後の大きな課題。子どもの活躍のためにも力を入れてほしいとの意見があった。
- 座長から、「地域デザイン講座について、委員の方々が社会参加としてやってほしいことは全てここに入れ込んでくれば、校長先生がそこから選べる」ので、運営しやすいとの意見があった。
- 座長から、計画のKPIにおいて、方針1の数値目標が先に出てくることに抵抗があった。目標が独り歩きすると先生が辛いと思っていたが、方針2の「学校に行くのは楽しいと思う」子どもが既に9割近くいる。これを見た時に、福井の小中学校の先生は良い教育をしており、学校が楽しいということは学びの場が担保されているため、先生方に私は感謝し、評価したい。その学校が楽しい子どもたちに対して方針1の数値目標を示すのはすごく意味がある。福井県の、学校が楽しい、友達もいる、先生も信頼されている中で出てくる学力の高さは意味が違う。次の5年大事にできると良いとの意見があった。
- 座長から、昔は、学校の先生は社会的ステータスが高く、校長先生は町の名士であったが、時代とともに工学・理学・医学等の博士号を持っている人たちが増えて相対的な地位下がり、保護者の方々が意見を思い切り言われるようになった。厳しい意見、要請に小中学校の先生が辛い思いをしているのではないか。そういう時の専門職みたいなものを県教育委員会が準備してもらえると良い。ワンストップ窓口を県庁につくってあげるとか、校区につくるとか。仕事を減らすことも大事だが、一番根幹の辛い部分を何とかしてあげられると良いとの意見があった。
- 委員から、文化芸術を学ぶ場所や表現する場所がないという現象が福井県の中で起こっている。子どもの教育は子どもへの教育だが、子どもが向かい合うものには必ず親が向かい合う。福井県全体の文化教育としても生涯学習として

も、子どもに表現のための文化教育をすることは、県全体の人間に対して教育をすることと感じているが、そこが福井県は力が弱い。そのため、福井の文化力は弱いという論議がされることが多い。学校教育だけに求めているのではなく、県全体の人間の教育、特に表現や文化をどう捉えていくべきかとの意見があった。

- 委員から、60～65歳の管理職を超えた人がどうDXを使いこなして、という話があったが、これは40代の後半や50代の先生も同じような問題を抱えている。DX化とチーム制が進むことで、当たり前になりスマホがあった世代の先生は、その波に乗って効率化していけるが、そうではない人と人が接して対面で物事に取り組んできた熱血の先生で、本来なら教育者としてすごい能力を発揮する人であればあるほど入りづらくなってないかという懸念があるとの意見があった。
- 委員から、実際問題として60歳を過ぎた人だけの話ではない。県はDX等の研修などを計画立てて行ってくれているが、それでも現場には使える人と使えない人がいる。熱血でやれる人もやってもらっていいと思う。ただやり方が昔のままだと、保護者からの反発を受けることもあり、校長は柔軟にやる必要があるとの意見があった。
- 委員から、保護者対応は非常に困難。弁護士を入れないと学校では対応できない問題が結構ある。いじめに関わること、事件に関わる事があると、学校は外にばかり注力できないため、弁護士を入れて、校長先生も弁護士に相談してもらい中に入ってサポートしてもらおう。今回スクールロイヤーが入っていないがどうなのかと考えている。そういった形でも支援していただけると良いとの意見があった。
- 座長から、新しい局面において60歳を超えた先生がきちんと働ける仕組みをつくること自体も新しい挑戦だと思う。県教育委員会でも知恵を絞って、新しいやり方を見つけていかなければいけないとの意見があった。
- 委員から、子どもが学校は楽しいと思うこと、教員が働くことへの喜びが感じられるということが最も大事で、順序というか、どういう関係で達成されていくことが大事かを考えていく。目標ありきでここは達成できている、という議論にならないことが大事との意見があった。

- 委員から、県のを市町に下ろしていくようなイメージだけではなく、今回の計画は子どもを中心にした、素晴らしい計画だと思うので、分かりやすい形で、是非福井県の計画も、小中高の生徒にも「大人はこんな風に応援してくれているんだ」と、地域の人や保護者にも「こういうふうに県が考えているんだ」と伝わるようなメッセージを、例えば分かりやすい動画など、発信のメディアも考えて出していくことが大事との意見があった。
- 委員から、SDGsを子ども自身が主体となって関わり、子ども自身が今後主体的に考えていくんだというメッセージを、これからの教育を考えていく時に重要。子どもに何かをするというだけではなく、子どもが私たちを超えて、より有能な学び手でもあり参加者でもある、そうした一員として、子どもと一緒に環境や地域のことを考えていくことが大事との意見があった。
- 委員から、文部科学省の諮問の中で、学習指導要領は概ね良いものだが、ただし上手く伝わってこなかったという反省点が出た。今回のプランも、先生方、子どもたち、一般の県民の方々に上手く伝わる方法が必要。また、諮問の中で大事なことの一つに、各学校の裁量がすごく増えたということがある。プランで示されたものをどう地域の実態に合わせて組み合わせて使っていくかということが求められてくるとの意見があった。
- 委員から、様々な特徴のある取組みが行われているため、具体例に合わせて説明していくと良い。教育の専門用語は県民には馴染みにくいものもあることを踏まえて、伝わるような、分かってもらえる説明が必要。さまざまな手法や手段を使っていくとよいとの意見があった。
- 委員から、これから10年から15年で中学校から高校に上がってくる生徒数は約1500人減る。平均して学年で100～150名ほど減るといふ急速な少子化の中、私学の経営も含んで、適切な定員設定をお願いしたいとの意見があった。
- 委員から、助金関係で、私学は学納金と、生徒一人当たり降りていく振興補助金がある。この振興補助金は全国で福井県の額は47都道府県で42、3番目。国の平均以下、ワーストに近い中で福井県の私学は頑張っているということは理解いただきたいとの意見があった。

- 座長から、チーム制でこれから学校を良くしていく上で、教員ばかりのチーム制は少し力が弱いのではないか、という指摘がある。CSW等のヘテロな集団が良いと言われていた。考えてもらえると面白いとの意見があった。
- 座長から、「家庭教育」を「家庭の体験や経験」に言葉を置き換えて文言をつくと違う感じを受けて上手くいくのではないか、という提案は良いとの意見があった。
- 座長から、時代が変わっていく中で、「子どもが親を超える、ということイメージして、私たちの世代は子どものサポートをすべき」と沢山の人が言っていた。そういう意味で、子どもが主体で世の中を変えていけるかもしれない、いわゆるSDGsの感覚を身につけるということはそういうこと。子どもが福井を守る、という形に持っていけるかどうか一つポイントになるとの意見があった。
- 座長から、恐らく、総合学習と教科学習と探究学習の言葉の使い方が事務局と委員で捉え方が違って、委員は探究をもっと広く捉えている。1対1の輪切りにしていない気がした。探究の良さが小さくまとまって面白くなくなってしまうように考えてほしいとの意見があった。